

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

米を巡る思い

飯(めし)は普通、米を煮て食べられるようにしたものを指すが、食事一般を指すこともある。ここでは主に前者の意味とする。米は日本人などの主食で、私はとりわけ大切に思っている。日々の食料以外にも用途は多い。米は歴史を見ても、政治、経済、社会において重要視されてきた。過去には武士の給料であったり、農民の税であったりした。

私が米の大切さを特に印象づけられて忘れられないのは、高校生の頃に遡る。その頃の私は伊豆の松崎町に住んでいて、東京に用事があって独りで沼津駅で列車に乗った。空いていた。座席は向かい合わせの4人掛けだが私の席は、私と前に座った力士風の人2人だけだった。初めは対話はなかったように思う。丁度昼時だったので私は駅弁を買った。飯とおかずの有り振れた幕の内弁当だった。箱は薄い木の板で、蓋は更に薄い経木(きょうぎ)であった。私は蓋を開けて昼食をとった。前の人はずっと見ていた。食べ終わって蓋をして捨てようとしたところ、前の人「君、蓋にご飯粒が残っている。北海道は冷害で米がなくて困っているんだ。」と注意された。私は「済みません。」といって蓋を裏返し、飯粒を箸の先で摘んで全部食べた。前的人是北海道の冷害による米の凶作のことを、優しく詳しく話してくれた。車中の2人は親しく対話した。私は名を訊いた。「名寄岩(なよろいわ)だよ」と答えた。「名寄岩」は有名な力士だったから、私は名は知っていたが、目の前の人の名寄岩さんとは気が付かなかった。私はこの体験を誇りに思った。飯粒一つももったいない事を教えられ、忘れられない印象となった。あとで気がついたが、この頃の名寄岩さんは最盛期を過ぎていて、やがて引退した。

私はずっと飯を大切に食べている。食器に盛った飯は一粒も残さない。食べ切れない場合は捨てずに次の食事に回すことにしている。飯を捨ててはならないと言う頑固さは、今も変わらない。

仕事で沖縄に単身赴任したことがある。外食もしたが自炊もした。その頃の炊飯には電気釜が普及していて、1人分の飯炊きは便利だった。釜の飯は全部食器に盛るが、釜の内側には飯の名残りが糊状になってこびり着いていた。普通はそれを釜の汚れとして、次の炊飯のために洗い流すが、私は釜の内側の糊状のものは飯が姿を変えたもので、汚れではないと思い、洗わずにそのまま次の飯を炊いた。糊状のものは、新しい飯と完全に融合して、飯は自然に見えた。

飯釜を洗わなければ、水の節約になるし、手間も省けるという利点があるが、それだけを言うと、人は横着と思うであろう。私は横着でそうしたのではなく、米を大切にしたい気持ちからであった。

山野を歩いて野営するとき、水場がないと水は貴重品になる。災害時には町中でも水が得られず、困ることがある。そういうときは、飯釜を洗わない知恵が役に立つであろう。

鍋釜や食器を洗うのは、それに無用のものが付着して、汚れて見えるからである。複数の人との共同生活では、什器は共用になるから、洗わないのは皆の納得が得られないであろう。洗わないのは一人で自炊する時なら独断できる。その代り来客に対しては、食器や食品が不潔に見えないよう、細心の注意を払うことにする。

什器を洗わないという考え方は、飯釜以外にも当てはまる。一般に食べ物を大切にするという考え方は、非常の時に役に立つ。しかし、食品の残り物は、気温、湿度等によって質が変化したり、蟻が舞ったり有害な細菌が増殖したりするから、特に衛生面の配慮が肝要になる。匂いを嗅ぐ、熱を通すなどは優先的な配慮事項と言える。

飯釜を洗わないことについて、知人との雑談で話題にしたことが何回かある。真面目に聴いてくれる人は一人もいなかった。それどころか非難する人さえいた。「そんなことをすると飯がまずくなる」と。